

学修成果の公開（2018 年度前期）

1. 授業評価と学習時間

(1) 本年度の手順

授業評価期間（7/18～7/31） ➡結果開示（8/1～9/14） ➡リフレクションペーパー開示（9/15～）

(2) アンケートの項目別平均 ※4 件法で集計

回答率	73%	主体性	3.58	学習時間	1.93	知識・技能	3.49	授業規則	3.46
シラバス	3.53	理解度	3.49	説明	3.55	熱意	3.61	満足度	3.53

(3) 大学の見解

①開学以来はじめて電子化を行いました。授業時間以外で回答を求めたことを考えると、回答率(73%)は低くありませんが、後期は 80%を超えられるよう、呼びかけを強化します。

②全体的に高い数値が得られましたが、1 科目当たりの学習時間には課題が残りました。単に宿題を増やすということではなく、教員研修を通して、授業設計の見直しを促したいと考えます。

③各項目とも上位 30 科目のほぼすべてが実技・演習・資格検定系、及び、留学生用の日本語科目で占められていました。講義から AL 型授業への質的転換を図れるよう、授業設計の見直しを進めます。

④学生用に開示された情報(科目別の結果やリフレクションペーパー)には必ず目を通してください。

(4) 学生評価委員の見解

①リフレクションペーパーへの認知度は低い。学生が関心を持つような提示方法を考えるべきだ。たとえば、告知メールからリフレクションペーパーのリンクに繋がるよう設定して欲しい。

②基本的に親近感のある先生のものしか読まない。学生に協力を求めるのならば、ゼミナール等でも回覧し、メンターやゼミ担とともに授業改善のための意見交換をすべきではないか。

③回答率が 50%を割っている科目がある。回答率を上げるのなら、回答時間は授業内の方が良い。

課題① 主体性（学修時間の増加）を育む授業設計

課題② 学生・教員協働による授業改善検討会の実施

2. 到達度自己評価

(1) 調査目的

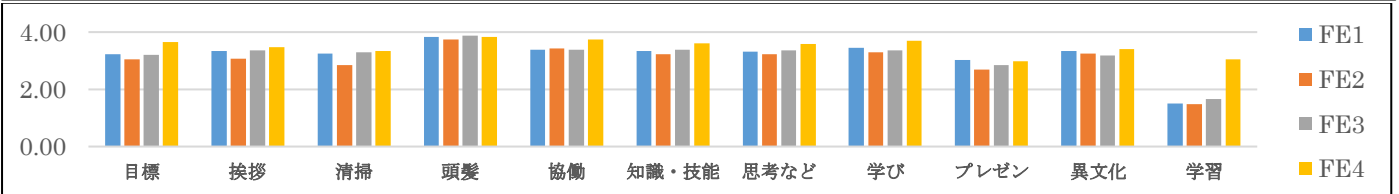
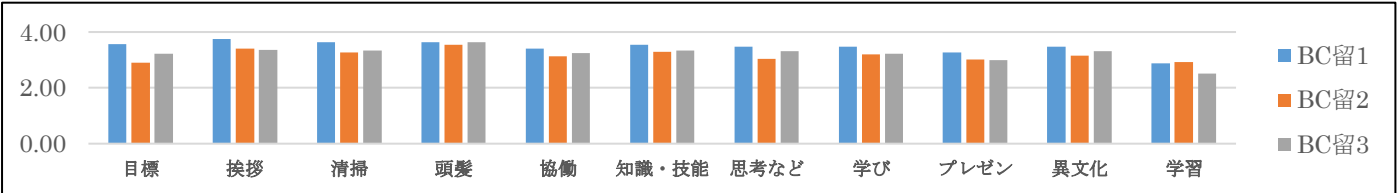
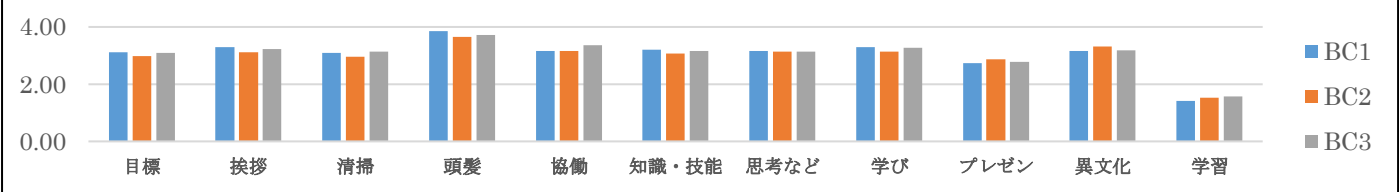
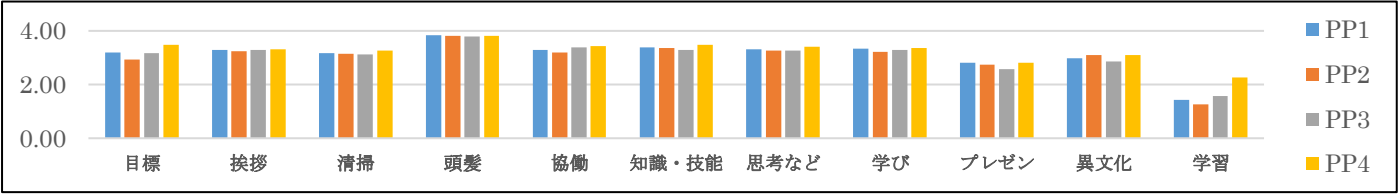
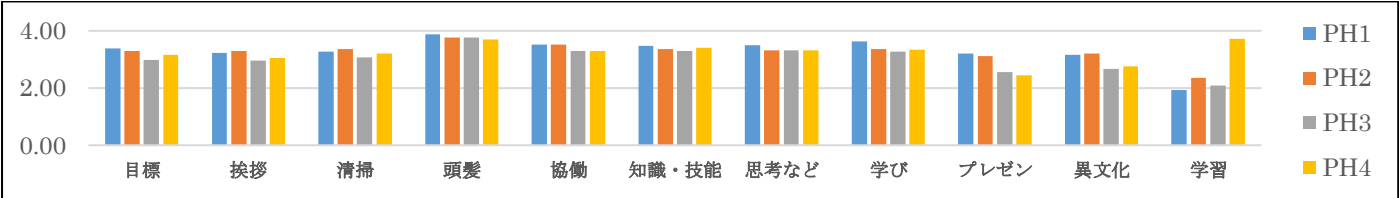
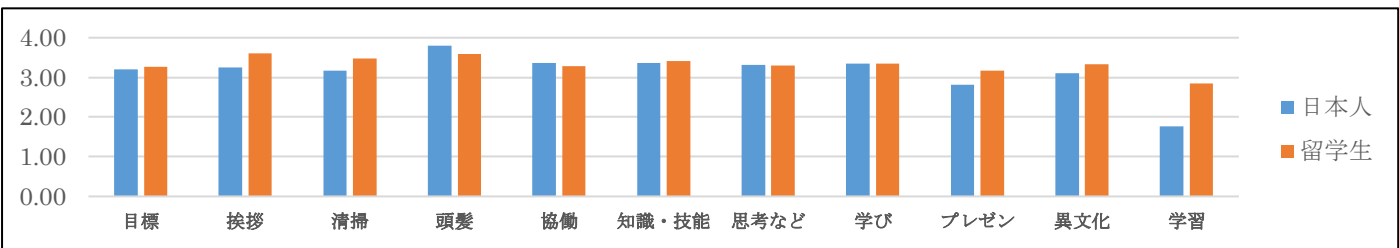
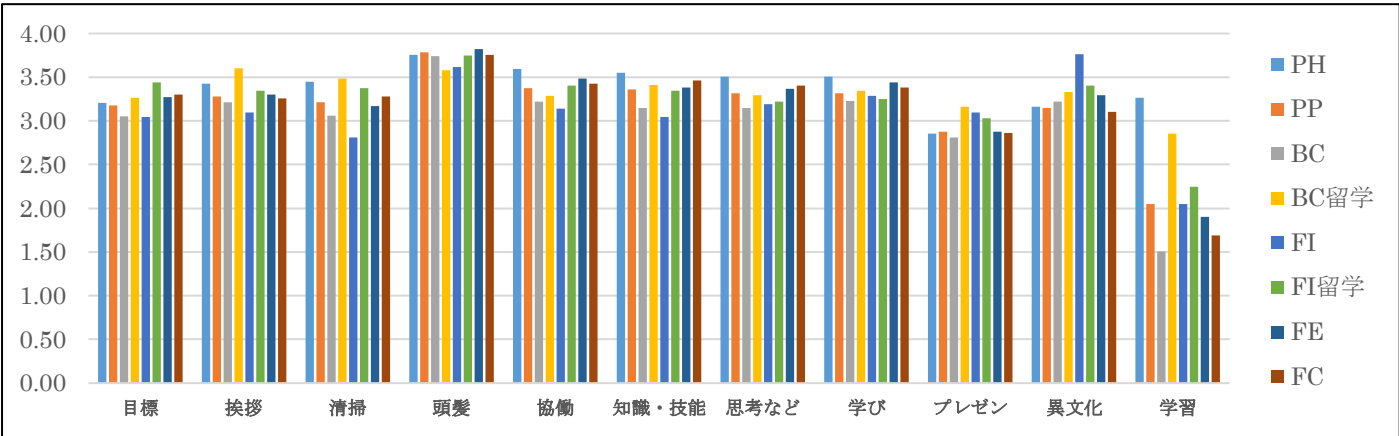
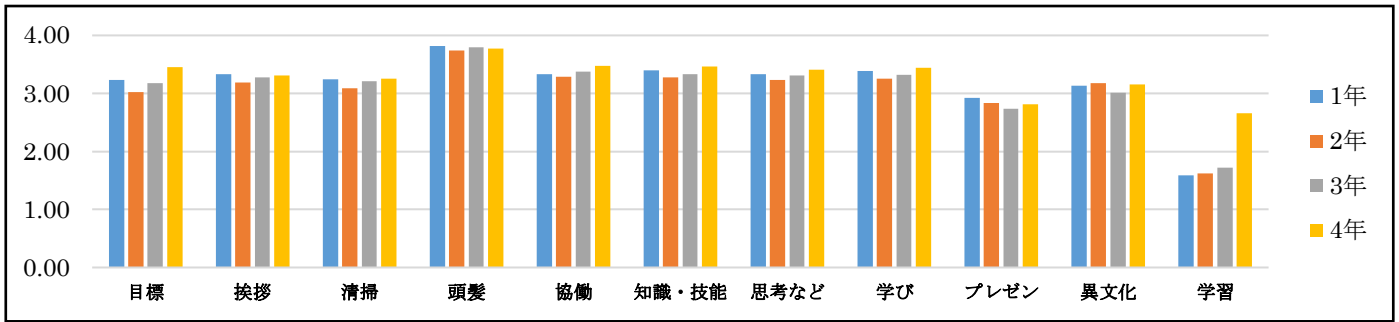
環太平洋大学が掲げる「建学の精神」や「ディプロマポリシー」に基づき、学生に自己評価を促したい項目を 10 種定め、半期終了ごとに自己点検を行ってもらうことにしました。なお、下記の 10 項目は平成 30 年度 IPU 教職員総会で教職員合意のもと規定されたものです。

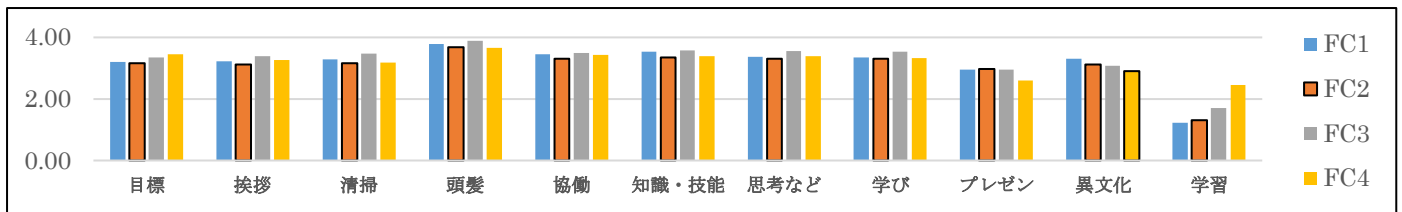
(2) 調査項目

①目標設定 ②挨拶 ③清掃 ④頭髪 ⑤知識・技能 ⑥思考・判断・表現 ⑦学びに向かう力 ⑧プレゼンテーション力 ⑨異文化理解 ⑩授業以外の自主学習時間

(3) 結果 (PH 健康科学 PP 体育 BC 現代経営 FI 国際教育 FE 教育経営 FC こども発達)

※平成 30 年 7 月 31 日の学期末集会で実施





(4) 大学の見解

- ①目標設定を含め2年次に揺らぐ傾向が見られる。1年次後期からの対応が急がれる。
- ②就職活動が近づくとしたがついてプレゼンテーションが下がるのは問題である。
- ③自主学習時間については、キャリアプランが明確な学生（健康科学科と留学生）ほど多くなる。

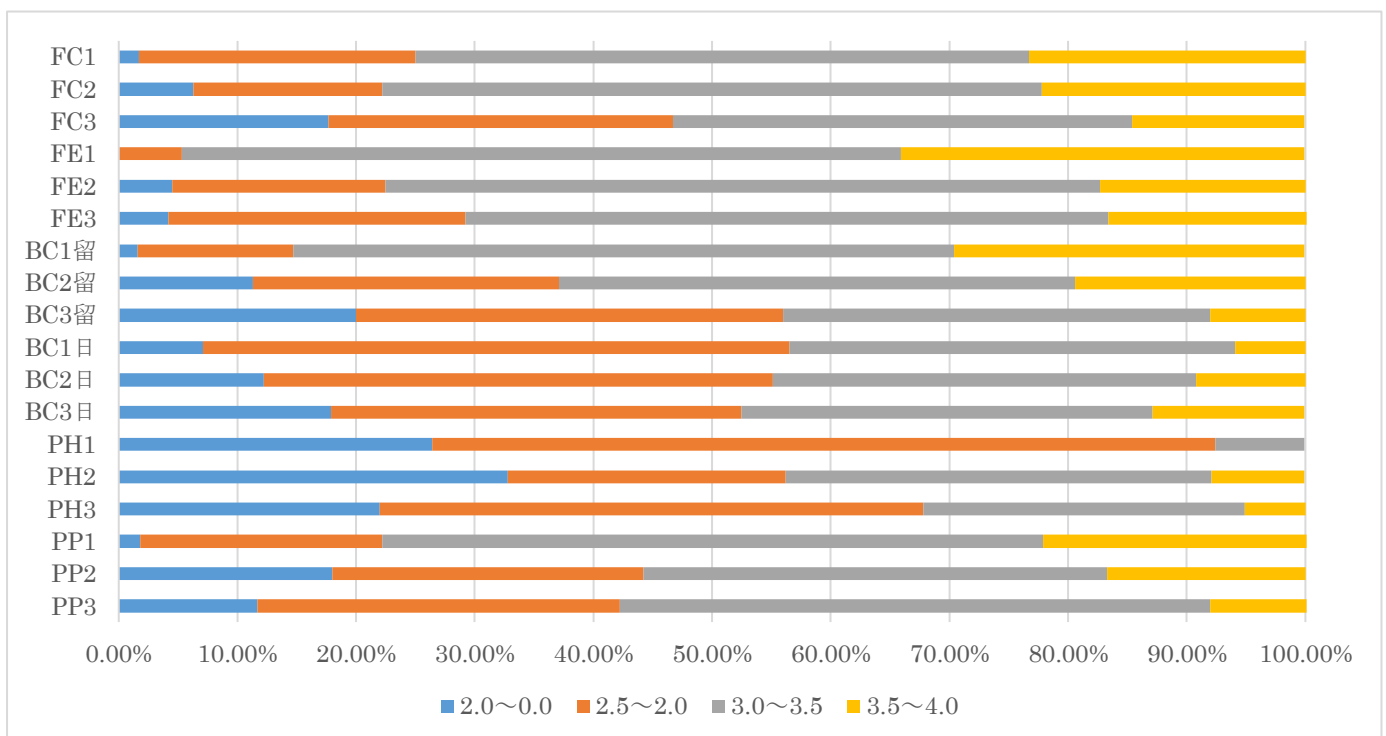
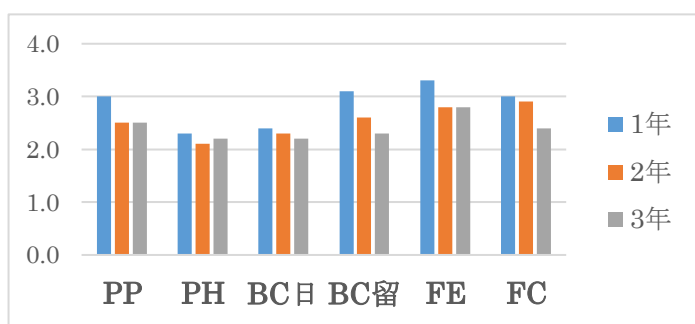
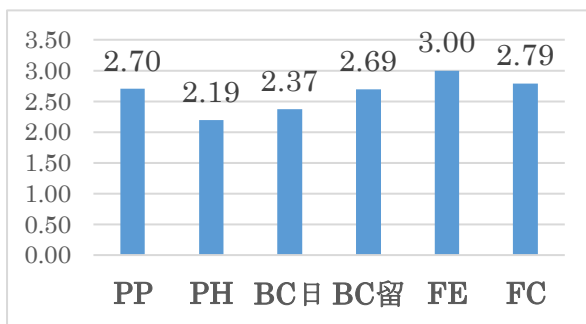
(5) 学生評価委員の見解

- ①2年次に下がる傾向には驚いたが、3年次で回復するのなら問題はないと思う。
- ②3,4年次の授業において、プレゼンテーションの機会が減っているように思える。
- ③入学後3年間の学習量が少ないのは、日常的な授業課題が少ないためではないか。

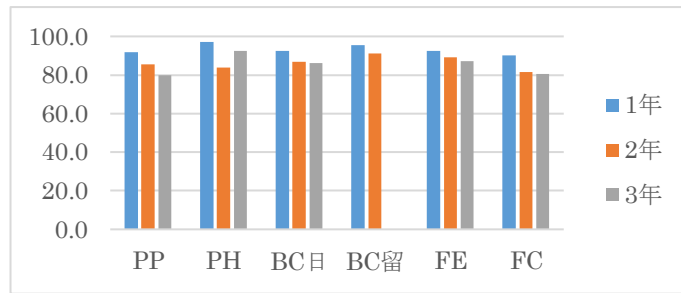
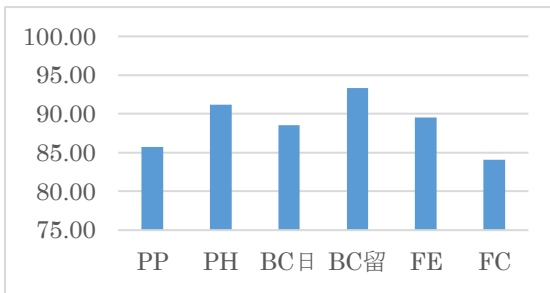
課題 4年後を見通したプレゼンテーション能力開発のための授業設計

3. 成績評価と出席率（2018年度前期） ※4年生を除く（就職活動のため）

(1) GPA



(2) 出席率



(3) 大学の見解

①GPA・出席率ともに「1年生がピーク」になるとともに、学科間格差が大きくなっている。GPAの格差は学科固有の到達目標の影響を受けるため、やむをえない現象ではあるが、教職員はこの現状について深く理解する必要がある。

②GPAを算出する前のGPの段階に戻って、教員別・科目別の観点から成績評価の在り方について再考すべきである。

③4年後の目標設定が明確な学生（健康科学科、留学生等）ほど出席率が下がりにくい傾向が見られる。他学科についても、V字回復とまでは言わなくとも、3年次で回復するよう努力すべきである。

(4) 学生評価委員の見解

①GPAの学科間格差に驚いた。平均GPAの高さは「卒業しやすさ」を表しているように思った。

②出席率に対する教員のこだわりが感じられない。教員からのアプローチがもっと必要である。

③学生に対して、進級や卒業への指標を随時提示するべきではないか。

**課題：目標設定や出席を促進するためのツールとしてのGPAの活用
→成績評価の平準化と進級判定・卒業判定・退学勧告への適用**

4. まとめ：改善点

- | | |
|---------------|---------------------------|
| (1) 授業評価アンケート | 授業時間内の回答促進、リフレクションペーパーの共有 |
| (2) 学習時間 | 予習・授業・復習を関連付けた授業設計 |
| (3) プレゼンテーション | 4年後を見通したカリキュラムマネジメント |
| (4) 成績評価 | 科目別GP平均や成績分布表の活用による再考 |
| (5) 出席促進 | 進級・卒業・退学基準の周知、教員との直接対話 |